

朝鮮前期無子女亡妻財産の相続をめぐる訴訟事例

文 叔子
翻訳：鄭 榮桓

目次

はじめに

I. 1560 年孫光呪・崔得忠の奴婢訴訟

1. 訴訟当事者の関係
2. 訴訟の展開過程

II. 1583 年李涵・金士元の奴婢訴訟

1. 訴訟当事者の関係
2. 訴訟の展開過程

III. 無子女亡妻財産相続規程の推移

結び

はじめに

朝鮮朝分財記などの各種古文書を見ると、無子女夫妻の財産相続と、それに関する訴訟が意外に多いことがわかる。この際の財産の処理問題は、一般の私家においてのみならず、朝廷でも幾度も問題となった。これは実録や各家門の分財記序文で、これらの財産に対する処理問題をめぐる論争がしばしば見出されることからわかる。これらのうち、無子女亡夫のものに関するものよりは、無子女亡妻に関する財産処理問題の方が、議論の焦点となっている。しかしこの問題は、法以前に人間の感情が多く介入し、「義絶」した娘婿はほとんどの場合財産分給から除外されており、既に分財された場合でも再び還奪されることもあった¹。

このような、本族の財産処分権は時期が早いほど明確に示されている。これは、『高麗史』に子息なしに死んだものの財産はその配偶者が所有し、配偶者が死んだ場合には、別途の文件がない場合、本族に返されるとされたことからわかる²。しか

し朝鮮初期以後の儒教的礼制秩序の定着過程で、承重意識あるいは父系親族意識が強化されてからは、むしろ奉祀者あるいは承重義子の立場が強化され、無子女亡妻財産の帰属も、義子女側に有利な方向で法解釈がなされるようになる。無子女亡妻財産相続を巡る訴訟は、単純な家族内の財産争いではなく、祭祀及び財産相続、女性の地位とその変化を見せてくれるという点で、社会的に重要な意味を帯びている。本稿で紹介する無子女亡妻の財産に関する訴訟事例は、1560 年(明宗 15 年)の慶州孫氏の孫光呪と和順崔得忠の間にあった奴婢訴訟と、1583 年(宣祖 16 年)にあった載寧李氏の李涵と安東金氏の金士元間の新奴婢訴訟である³。

これらの訴訟は義子女の権限が強化されていた時点で提起された事件である。まず二つの訴訟事件の推移と争点を検討し、その後、無子女亡妻財産の処理と関連する実録及び法典の記録を併せて考察したい。

I. 1560 年孫光呪・崔得忠の奴婢訴訟⁴

1. 訴訟当事者の関係

この訴訟は、和順崔氏・崔得忠が、姑母の義孫である孫光呪など慶州孫氏の家門を相手に起こした訴訟で、裁判期間は 1560 年 11 月 1 日から 12 月 10 日までの約 40 日間であり、担当官庁は慶州府である⁵。被告の慶州孫氏の家門は、15 世紀に孫

別有文契者、不在此限(『高麗史』卷 38、恭讓王四年條)。
³ 両訴訟事例は『慶北地方古文書集成』(李樹健編、嶺南大出版部、1981 年)に立案文記が掲載されており、その全貌を把握できる。このうち載寧李氏と安東金氏間の訴訟立案文記は、文記の前の部分に多少欠落はあるが、訴訟の進行過程を要約・整理する立案文記の性格上、欠落した前部分も十分推測可能である。
⁴ 『慶北地方古文書集成』、529-542 頁、「孫光呪・崔得忠 奴婢訴訟立案文記」参照。

⁵ 本訴訟は四年前の 1556 年に、すでに和順崔氏家門により提起され進められたことがある。しかし訴訟を提起し

¹ 『安繼宗妻金氏 分財記(1535)』を見ると、娘婿張應弼が末女が死ぬと亡女の財物を奪い返し妻家を顧ないと、妻家ではすでに許給された財産を還奪し、娘が婚姻した際に持って行った新奴婢のみを娘の奉祀條として与えている(李樹健編『慶北地方古文書集成』嶺南大出版部、1981 年、140-142 頁)。

² 都官上書、一無子孫身死者、其夫得前妻之奴婢、其妻守信、則亦得前夫之奴婢、止許終身、歿後各歸本孫、其

士明・孫旭・孫昭・孫仲噉など父子兄弟四名が文科に及第し、孫仲噉兄弟と外孫である晦齋李彦迪の代に至って、一門が最も隆盛した⁶。一方、原告側である和順崔氏も、訴訟に直接関連している崔世温の祖父・崔善門の代に金山に世居し、金宗直一派から見れば先輩の位置にあるなど、在地士族かつ性理学者として嶺南一帯に家勢を轟かせた家門である⁷。

訴訟は、崔世温の妹が孫仲噉の後妻に入るも無後身死し、続いて崔世温の娘・和順崔氏が孫仲噉の孫である孫光曙の先室として無後早死すると、崔氏一族が死んだ二人の財産を取り立てようとしたことから始まった。まず本奴婢訴訟と直接関連するこの家門の系譜を作成し、分記上の姻戚関係を図表を通じてより明確に把握する必要があるだろう。これを表したものが〈図 1〉である。

2. 訴訟の展開過程

事件は、原告崔得忠の姑母である和順崔氏が、孫仲噉の後妻に入り無後身死したところから始まった。しかし孫仲噉の妻崔氏は、生前に夫の意思に従い夫辺及び自らの側の伝来の財産を前妻子女に依法分財していたため、当時は問題にならなかった⁸。その後崔氏は、姪である崔得忠の妹を、養女として崔氏の（義）孫子である孫光曙と婚姻させたが⁹、養女の崔氏も無後早死し、孫光曙は慶州金氏を後妻に迎えた。その後孫光曙さえも死ぬと、崔得忠は、その姑母・和順崔氏の財産¹⁰を、孫光

曙の後妻である慶州金氏とその子が相続することを憂慮し、これを取り戻そうと訴訟を提起したのである。つまり、崔得忠が訴訟を提起した理由は、自分の姑母と妹の分の財産を、何ら血縁関係の無い慶州金氏とその子、孫夢龍に与えたくないというところから来ていた。

崔得忠は訴訟の過程で、祖母である李氏が、自らの父・崔世温など子女らに財産を分け与えた分財記を提示した。この文記では、孫仲噉の妻・崔氏の財産を奉祀條奴婢 2、3 口を除外して崔世温に専給するとされている。つまり、現在の孫光曙の後妻・金氏と、孫光曙らが持っていた姑母の奴婢を、元財主（祖母の李氏）が処分した通りに本族へと返さなければならないという主張である。しかし、これに対して被告の慶州孫氏側は、その分財記は偽造されたものであると主張した。一方、官の立場としては文記偽造の有無とは関係なく、厳格に法を適用し、双方全てに分数決給した。事件の展開過程は次の〈表 1〉の通りである。

まず〈表 2〉の g) 項の金氏に決給された奴 3 口と田 72 ト 3 束は、崔氏が承重孫である孫光曙に前にすでに別給していたものであるため、分数には含めなかった¹¹。また b) 項と g) 項の奴婢相換にしても、すでに交換して使役していたため、これを認めたものに過ぎない。b) 項の本族・崔得忠分の奴婢 3 口と、f) 項の孫暎¹²及び h) 項の孫夢龍分の奴婢各 1 口は、上の〈表 1〉11 項の立案内容の中の③項¹³に従ったものである。これらを除外した a)、c)、d)、e) 項の内容、すなわち奴婢 30 口¹⁴に対する分給が大典に依拠した決給内容となる。ここで主として適用されたのは、

「無子女前母・継母奴婢、義子女五分之一、承重子則加三分」¹⁵

という大典の規定である。無子女前母・継母の奴

た和順崔氏家門内の事情により停訟され、再び訴訟に臨むこととなった。こうした訴訟の過程については後述する〈表 1〉に詳細に記した。

⁶ 李樹健『嶺南士林派の形成』嶺南出版部、1979 年、30 頁。

⁷ 李樹健、前掲書、201 頁。

⁸ 李樹健「良洞の歴史的考察」『良佐洞研究』嶺南大民族文化研究所、1990 年、66 頁。

⁹ 本訴訟文記には姪、すなわち崔世温の娘を養女としたという記録は無いが、養女とその夫に財産を許給する分財記を通して知ることができる。

嘉靖十六年、丁酉（中略）孫光曙亦中、許与右許与成置事段、矣身亦、無子女乙仍于、□□是在、矣三寸侄女乙、參歲前収養情愛重大、矣身乙朝夕奉養無異親子為平等用良（後略）（金東旭『古文書集真』延世大、1972 年、54 頁）。

¹⁰ 後に妹である孫光曙の妻、和順崔氏のものとなる。

¹¹ 前に提示した 1537 年（丁酉年）の分財記参照（金東旭『古文書集真』54 頁）。

¹² 孫暎の残りの奴婢 1 口については後述する。

¹³ 残りの奴婢 5 口は金氏の息子と良妾子に各 1 口、本孫である崔得忠に 3 口を決給すること。

¹⁴ 田 72 ト 3 束を奴婢 1 口と相換して使用しているため、計算の便宜上これを奴婢 1 口に該等するものとして換算した。

¹⁵ 『經国大典』、刑典、私賤條。

婢を、義子女が五分の一相続できるとするならば、残りの五分の四は本族の相続分となる。すなわち、本族対義子女の相続比率は 4:1 であることを意味する。これは本族の数や義子女の数を無視して全体的な比率を規定したものであり、本族間もしくは義子女間で内部的に分けるのはその後の問題である。これに続く「承重子には三分を加給する」の内容が問題となる¹⁶。これに関連して『詞訟類聚』私賤條は次のように規定している。

「無子女前母・継母奴婢、義子女五分之一、承重子則加三分
謂義子女、与前母継母使孫等、五分之一、承重子每分加三分三口並四口、与使孫皆四口」¹⁷

これを通じて義子女の中の誰かが承重する場合、自身の分に三分を加え、本族と同様に 4:4 の比率で分給されることがわかる¹⁸。

実際、決給内容を見ると本族である崔得忠分として奴婢 15 口が、承重義子である孫ギョン分として奴婢 7 口が与えられており、一見大典の条項と大きく異なるような印象を与える。だが、承重義子ではない他の子女、すなわち曹国良妻と鄭灝妻がそれぞれ奴婢 4 口と 3 口ずつを、良妾子である

孫暎が奴婢 1 口を官により決給されており、慶州孫氏の家門が決給された奴婢を合計すると、本族である崔得忠が受け取った奴婢と同じ 15 口になる。

よって「先妻の子が承重子となる時は、子女らのうち承重義子のみが後妻の子女¹⁹と共に、後妻の有産相続に参加する」という見解²⁰は誤りであることが、本訴訟で大典の規定に依拠して立案された内容から明らかになる。つまり、孫仲墩の先妻・南陽洪氏の所生で承重義子である孫ギョンのみならず、彼の二人の娘も後妻の和順崔氏の財産相続に参加している。よって大典の「無子女前母・継母奴婢、義子女五分之一」の規程は、「本族が占める分：全義子女が占める分」と解釈するのが正しい。

II. 1583 年李涵・金士元の奴婢訴訟²¹

1. 訴訟当事者の関係

この訴訟を提起した原告側載寧李氏は、16 世紀以来寧海に定着した家門で、義城金氏・真城李氏などの嶺南の有力家門とも婚姻及び師友関係を結んだ、代表的な士族家門の一つであった²²。一方、被告である金士元の家門は、本貫が安東であり、代々仕官を出した家門であった。そして、訴訟が提起されたとはいえ、両家門はどこまでも義同四寸の間柄であった。のみならず訴訟の最中にも現われたように、裁判を担当した訟官（義城官）もまた、両家門の双方と姻戚関係で結ばれていた。こうした士族間の複雑な婚姻関係により、この訴訟は結局調停を通じた和解で幕を閉じることになる。

〈図 2〉は本訴訟と関連する姻戚関係を表したものである。

2. 訴訟の展開過程

両家門の間で、無子女亡女財産に関連する訴訟がしばしば惹起したのは、新奴婢分財及び奉祀問題と深く関連している。新奴婢の分財は元田民の

¹⁶ 『経国大典』では例えば「父母奴婢、承重子加五分之一（如衆子女各給五口、承重子給六口之類）衆子女平分（後略）」などの条項に見えるように、加給分を分数で表し、内容をまた注記を通して明確に示している部分がある。しかし義子女と関連する前の条項では、分数ではなく「三分」とだけ記されており、注記も無いため大典の規程だけでは判断を下すことが困難であるように思う。

¹⁷ 『詞訟類聚』には、この外にも議論の余地がある『経国大典』の相続関連規程を明確にする条項がある。「嫡無子有女者奴婢、良妾子承重、則其分加二分、謂嫡女六口、承重良妾子其分一口、加二分二口、並三口、每分加二分」もその一例である。すなわち、経国大典の規程に依拠し、良妾子女は衆子女の七分の一の奴婢を受け取ることができるため、衆子女：良妾子女の相続分は 6:1 (6 分:1 分) となる。上の例に従い衆子女が 6 口であれば、良妾子女は 1 口になるのである。しかし嫡室に娘だけがいて良妾子が承重する場合、良妾子の分 (1 分、1 口) に 2 分 (2 口) を追加することとなり、3 口となる。

¹⁸ すなわち、元来義子女の相続分は五分の一であるため、義子女：本族の相続比率は 1:4 (1 分:4 分) であった。しかし承重義子の場合、一分であった元来の分に三分を追加し、四分を所有することになるため、承重義子：本族の比率は同じ 4:4 (4 分:4 分) となる。

¹⁹ 後妻に子女が無い場合には、その本族が参与する。

²⁰ 朝鮮総督府中枢院『李朝の財産相続法』1936 年、37-38 頁。

²¹ 前の『慶北地方古文書集成』、550-556 頁、「李涵・金士元奴婢訴訟立案文記」参照。

²² 文叔子「載寧李氏寧海派家門の分財記分析」『清溪史学』9、1992 年、82-90 頁参照。

分財と異なり、婚姻当時に行われる²³。よって婚姻した娘が子息無く早死した場合、すでに分給された新奴婢の帰属をめぐっては婚姻当事者間で法と慣習上多くの議論がなされてきた。また娘婿が再婚し、加えてその娘婿が関係を絶って義絶した時には、前妻家では彼を分財対象から除外するのは勿論、すでに支給された新奴婢すら還奪した。これは新奴婢分財行為自体が、ほとんどの場合文書無しに行われたため法的な拘束力が弱く²⁴、人間的人道的次元で行われたためと考えられる。このような分財の性格の曖昧さゆえに、紛争がしばしば起こり、ついにはこの問題が正式な法律として整備されることになった²⁵。

一方、早死した亡女の場合も、奉祀及び奉祀條財産の問題が随伴した。「奉祀服喪義子女」に関する規定が生まれたのもこのためだった²⁶。亡女の奉祀に経済的負担を負うのは、当然ながら亡女の本族であった。本訴訟も、亡女の新奴婢及び奉祀條田民の収受をめぐって、亡女の本族及びその義子女間で生じた事件であった。まず本訴訟の概要を紹介しよう。

原告である李涵がこの訴訟を提起したのは、李涵の前母（李殷輔の前妻、安東金氏）が早死すると、生父である金塘がその新奴婢を奪い、生子女に再分財し、義子である李涵自身には前母の奉祀條すら分給しなかったためである。李殷輔の妻安東金氏は1538年（中宗33年）11月、李殷輔と婚姻し、その本家より奴婢4口を新奴婢として分給された。しかし婚姻して十ヶ月後の翌年9月に安東金氏が死ぬと、その父金塘は新奴婢を還奪した。この新奴婢は金塘の死後、彼の生子女である金世佑・権徳リンの妻に分財され、訴訟当時には権徳リンの息子権永緒・権興緒、そして金世佑の娘婿である李軫などがその奴婢を所有、使役していた。ところで李涵が訴訟当事者とみなしたのはこれら

時執人ではなく、安東金氏家門の宗孫である金士元であった。つまり、李涵と金士元に代表される本族との、無子女亡女財産をめぐる紛争であったといえることができる。

この裁判の管轄官庁は被告金士元の所在官である義城官であり、裁判期間は1583年2月²⁷から同年4月19日まで、閏月を含めて約三ヶ月間である。事件の推移を時期別に要約整理したのが〈表3〉である。

〈表3〉にあるように、原告である李涵側の主張は、金塘がすでに分財した新奴婢を還奪したのは不法であり、当然に返還されなければならない、ひいては先母の奉祀條財産も分給されなければならない、というものである。原告側主張の根拠は、

前母・継母・乳母新奴婢所生、奉祀・服喪義子女處專給、勿給使孫²⁸

三歳前養子女・承重義子、即同親子女、雖遺書有勿許他之語、勿用²⁹

などの条項である。これに対し、被告金士元側は受教内の「元財主已区處之物、則不許更改」³⁰の条項を根拠に対抗した。

結局、この訴訟はいずれか一方に勝訴判決が下ったのではなく、和論により和解が成立して幕を閉じた。しかし、実際の内容においては被告側の理屈で原告李涵側の主張が受け入れられたことにより、新奴婢³¹とその得後所生及び奉祀條奴婢、計5口が次のように許給されている。

このうち①婢・莫莊（68）は李涵の前母である安東金氏が婚姻する際、その父母より譲り受けた新奴婢³²のうち、本訴訟当時まで生存していた奴婢であり、②婢 莫今（23）はその得後所生である。これ以外の3口は、承重義子である李涵に奉祀條

²³ （前略）婚嫁時、必有新奴婢、此父母親給奴婢也。雖不加給、不可無奉祀奴婢也」（『成宗実録』巻56、6年6月、甲辰條）。

²⁴ すなわち、新奴婢は成婚時に分給したとしても、その当時には別途の文件を作らず、後に財主死後に作成する分財文記にその内容が記録するためである。

²⁵ 新奴婢例無文券、相弁帰一者外、以元奴婢例平均分給（『統大典』、刑典、私賤條）。

²⁶ 前母・継母・乳母新奴婢所生、奉祀服喪義子女處專給、勿給使孫（『受教輯録』、刑典、私賤條、嘉靖、戊申、承伝）。

²⁷ 文記の前の部分が欠落しており、正確なことはわからないが、2月21日以前である。

²⁸ 『受教輯録』、刑典、私賤條、嘉靖、戊申、承伝。

²⁹ 『経国大典』、刑典、私賤條（「用祖父母以下遺書」に注記されている）。

³⁰ 『受教輯録』、刑典、私賤條、嘉靖、戊申、承伝。

³¹ 李殷輔の前妻・安東金氏が婚姻した当時にもらいうけた新奴婢を意味する。

³² 安東金氏は李殷輔と婚姻することにより、自身の父母より4口の新奴婢（奴・豊年、莫従、婢・莫莊、仁介）をもらいうけた（「李涵・金士元奴婢訴訟立案文記」、李樹健編『慶北地方古文書集成』、1981年、551頁）。

の名目で支給された奴婢であると考えられる。

Ⅲ. 無子女亡妻財産相続規程の推移

高麗時代より無子女身死者の財産に関する処理規程は、男女を問わず一貫して議論の種であった。

『高麗史』よりこれと関連した資料をまとめると次のようになる。

A-1) 恭讓王 郎舍上疏曰(中略) 祖業人口 勿許孫外相伝 雖無後者 養其夫婦中同宗者 相伝³³

A-2) 都官上書 一 無子孫身死者 其夫得前妻之奴婢 其妻守信 則亦得前夫之奴婢 止許終身 歿後各歸本孫 其別有文契者 不在此限³⁴

A-1) の資料を通して見ると、無子女亡女の場合、高麗時代には同宗(本族)による財産相続が当然であったと判断できる。高麗後期に至ると A-2) にあるように、女子の場合守信せねばならないという条件が付加された。しかし男女共に生きている間は、死んだ配偶者の財産を使用することができ、財産の孫外与他禁止と本孫の強い財産管理・相続権は、朝鮮時代に入っても財産相続の基本精神であった。よって朝鮮時代財産相続における法的・慣習的土台は、すでに高麗時代に成立していたといっていいいだろう。

無子女夫妻に関する財産相続慣行もまた、高麗時期に定着したと考えられるが、その性格は徹底して夫婦相互間における平等な財産相続権の認定であった。女子の場合に守信の条件が追加されたのは、後期のことであった³⁵。こうした高麗的要素は朝鮮初期にもそのまま維持されていたと考えられる。ただ女子の場合に、許与時に夫とは異なり承認・筆執が要求され³⁶、男女共に還本孫時に

使孫の範囲が定められる等³⁷、一部変化した要素が生じているのみである。

しかし世宗代にはこうした慣行に、次の資料 B) のような一大変化が生じる。

B) 議政府にて刑曹の牒呈に依拠して啓ずるに、「いま世俗では無子女亡妻奴婢は、その夫がそのまま継ぎ使役するも、他の妻を娶ればその奴婢は本宗に返します。思うに夫が妻の死んだ後に改娶することは、夫人が改嫁することとは異なり、義絶する理が無いいため、奴婢を本宗に返すことは穏当ではありません。(中略) 請うに、これからは無子息亡妻奴婢はその夫が使役し、彼が死んだ後に後妻所生承重長子に三分の一を与え(中略) 残りの奴婢はみな本宗に返すこととし(中略) 承重義子は情義がより重いため本孫でないとしてしまうと事理に合いません。仮に祖上の遺書に「本孫で無ければ他人に与えられない」との言葉があっても、請うに、正統 3 年 9 月の受教に依拠し、遺書の有無とは関係なく一切を前項の条件に従い施行するようしていただきたい」としたため、そのまま従う³⁸。

つまり、仮に無子女亡妻の夫が改娶したり、あるいは死亡したとしても、その財産を本孫にみな返すのではなく、そのうちの一部(三分の一)を承重義子に与える条項が生まれている。高麗朝から女子の場合守信の条件が付加されていたが、実際には男子の場合でも改娶と同時に亡妻の財産を本族に返していた。しかし世宗代に入り、夫が改娶したとしても、そのまま亡妻の奴婢を使役することができ、夫の死後には後妻所生の承重長子に

論文契有無、既還本孫(中略) 允之(『太祖実録』、卷 12、6 年 7 月、甲戌條)。

³⁷ 議政府上各年受判、永為遵守奴婢決折條目、允之、凡二十條(中略) 一無子息夫妻奴婢、雖無文契、其身使用、夫娶他妻女適他夫者、限使孫四寸分給、無四寸屬公(後略)(『太宗実録』、卷 10、5 年 9 月、戊戌條)。

³⁸ 議政府拋刑曹呈啓、今世俗無子息亡妻奴婢、其夫因仍使喚、及改娶他妻、則其奴婢則還本宗、竊惟夫之亡妻數改娶、非婦人改嫁之比、無義絶之理、而還奴婢于本宗未便(中略) 請自今無子息亡妻奴婢、其夫使喚、及其身死、於後妻所生承重長子、給三分之一(中略) 其余奴婢、並還本宗(中略) 承重義子、情義尤重、論以非本孫、万無是理、雖於祖上遺書有曰、非本孫毋得与他之語、請依正統三年九月受教、勿論遺書有無、一依前項條件施行、從之(『世宗実録』、卷 96、24 年 7 月、甲戌條)。

³³ 『高麗史』卷 85、刑法、奴婢條。

³⁴ 『高麗史』姜 38、恭讓王、4 年條。

³⁵ しかし慣習上は、朝鮮初期世宗代までは夫の場合でも、改娶と同時に亡妻の財産を死んだ妻の本族に返している(後述する資料 B) の内容を参照)。

³⁶ (前略) 疏上十九條曰(中略)、一無子息夫妻奴婢、雖無文契、亦許其身使用、身後本孫許給、夫与妻成文許給者、從許与伝繼、妻為夫許与者、但以印信・手寸取信難便、必有証筆的実、然後方許決給、其妻不守信者、勿

三分の一を与え、残りの三分の二のみを本族に返すものと論じられている。これは全財産を本孫に返していた以前と比較して、重大な変化であった。また、夫婦両者間の徹底した平等相続権を認めた高麗時代とは違い、世宗代になると女子の場合に限り守信が前提条件となり、男子の場合には改娶の有無と関係なく死んだ配偶者の財産に対する処分権を有するようになる。そして奉祀の有無が財産相続の重要な要素として登場し、承重義子の場合、本孫ではないが、堂々たる財産相続権者として浮上してきている。

無子女亡妻財産に関する処理問題は、『経国大典』に至り正式な法律として一旦整備される。経国大典では、資料 C-1) に見られるように、相続分数にあって本族よりも承重義子に一層有利なものとなった。

C-1) 無子女前母・継母奴婢、義子女五分之一、承重子則加三分

C-2) 三歳前養子女、承重義子、即同親子女、雖遺書有勿許他之語、勿用³⁹

すなわち、義子女は亡妻財産の五分之一を（本孫対義子比率 4:1）もらいうけ、義子女が承重した場合には三分が追加され、本孫と義子女の相続比率が 4:4 となり、全く同じになるところにまで至った⁴⁰。

これは前の世宗代の資料 B) と比較した場合、義子または承重義子の相続における地位がそれほど強化されたということを示すものである。

また C-2) の規程を通して、承重義子と収養子は親子女と同一視され、遺書が本孫以外の他人には財産を許給するなど記しても、これに拘束されなくなった。これもやはり世宗代から議論されてきたものが、正式に法制として定着したものであり、承重義子の場合亡妻にとって本孫よりも近い親子のように認識されるようになったのだ。このように無子女亡妻財産において、承重義子女の地位が強化されるようになった名分は、無子女亡妻

⁴¹に対する奉祀であった。この後にもこれと関連して「妻が死んで数十年後に妻の父母と称して未分奴婢を争訟により得ることは情理に合わず、むしろ娘婿が後妻を娶り息子が生まれた際に、奉祀をすると称して分給をもらいうけるのは妥当である」などの論議が出てきている⁴²。すなわち、無子女亡妻の場合、その財産を本族に返すよりは承重義子に奉祀條として与える方が情理に合うということである。

16 世紀中盤になると、以下の D-1) の明宗 3 年 (1548 年) の規程に見えるように、義子女に対する相続権がより強化され、奉祀服喪義子女の場合、新奴婢とその所生を専給され、使孫に与えないようにした。これに続き D-2) のように、義子女を親子と同様に扱い、前母・継母の財産を期限とは無関係に使用できるよう措置した。

D-1) 前母・継母・乳母新奴婢所生 奉祀・服喪義子女處専給 勿給使孫⁴³

D-2) 義子女之於前母・継母 其分己者之際雖有分数殊 母子大義 与親母不可輕

重 而定以限年未穩 但元財主已区處之物則不許更改⁴⁴

要するに、無子女亡妻財産の相続は、その権限及び比率にあって時期が早いほど亡妻の本族側に、後期に行くほど義子女側に有利に展開する傾向を示している。これは前述したように儒教的礼制秩序が定着する過程で、承重・奉祀意識及び父系中心の親族体制が強化されていく時代的潮流と不可分の関係にあると考えられる。

結び

財産相続をめぐる争われた訴訟は、互いに自らに有利なあらゆる証人や証拠、とりわけ分財記や遺言など財産相続文書を提出するため、裁判そ

³⁹ 『経国大典』、刑典、私賤條。

⁴⁰ この規程の適用の実例を、II 章の慶州孫氏と和順崔氏の奴婢争訟で紹介した。

⁴¹ 承重義子の立場からは前母あるいは継母となる。

⁴² (前略) 妻亡数十年之後、稱為妻父母、未分奴婢争訟分得、不合情理、且壻更娶後妻有子、則稱為奉祀、而分得猶可說也 (後略) (『成宗実録』、卷 56、6 年 6 月、甲辰條)。

⁴³ 『受教輯録』、刑典、私賤條、嘉靖、戊申、承伝。

⁴⁴ 『受教輯録』、刑典、私賤條、嘉靖、戊申、承伝 (1554 年)。

れ自体のみならず、士族らの日常生活とその裏面を赤裸々に見せてくれる。本稿で紹介した無子女亡女財産の処理問題も、そのうちの一つである。元来士族たちは、いかなる問題であれ訟事にまで至ることを極めて恥すべきことと考えた。李涵・金士元の訴訟が互いの和解により終結したのは、まさにこのためであった。しかし、ここで紹介した二つの事例で当時の士族たちがみな、証拠文件のみならず、当時の法条文と受教内容まで提示しながら訴訟の臨み、官側でもこうしたことを土台に処分を下していたことが当時の慣例であった。

無子女亡女財産の処理は、法以前に人間の感情問題と関連し、当時としては極めて厄介な問題であった。経国大典に至り定着したこれに関する法律も、朝廷での熾烈な議論の末に下された結論であった。しかし当時の分財記序文などで言及された内容を見ると、法そのものよりも、感情や死んだ娘の奉祀の必要性により相続比率が定められる場合が多かった。実際、16～17世紀の古文書を見ると、無子女亡女財産は大体が法により分財されているが、各家門の慣習や人間関係に従い少しずつ異なる様相を呈している場合もある。義絶した娘婿から亡女の財産を還奪する例や、義絶した娘婿にむしろ死んだ娘の奉祀を考えて優待する例⁴⁵などがそれにあたる。

高麗朝以後、朝鮮初期までは亡女の財産の帰属は本族により有利であったが、16世紀を前後して義子女への帰属が強化された。これは、亡女に対する奉祀を義子女が引き受けることになり、また父系親族を重視する時期的変化が生じたことが、重要な要因として作用したものである。無子女亡女財産が承重義子に漸次集中する傾向は、朝鮮朝の財産相続が奉祀と不可分の関係を結んでいたことを端的に示しているといえるだろう⁴⁶。

⁴⁵ 載寧李氏の場合は、1641年の分財時に義絶した娘婿に、死んだ娘の奉祀を考えて却って財産をより多く与えており、これを分財記序文に明示した（前の『慶北地方古文書集成』229頁、「李涵妻李氏分財記」）。

⁴⁶ 本論文の初出は、以下の通りである。

『古文書研究』5、韓国古文書学会、1994年。

〈表 1〉 孫光呪・崔得忠奴婢訴訟事件の推移

年代	呈訴者	内容要約
1. 1560.11.初 1	故崔世温妻 申氏	所志を提起した理由(夫である崔世恩の奴婢を慶州孫氏家で使役している経緯)説明。 ①故孫仲噉の後室である崔世温の妹が無後すると、財主母李氏は丁亥年(1527年)財産許与時の奉祀條 2・3 口を除 外して、崔世温に与えた。②しかし孫仲噉の先室の孫・孫光曙を娘婿として迎えると、その財産を推尋せず、孫光曙妻に そのまま与えた。③孫光曙妻も無後すると、孫光曙の後室 慶州金氏、孫仲噉前室の息子などが崔氏の奴婢を占有し、 使用している。
2. 1560.11.	故崔世温妻 申氏	病があるため子・得忠に代わり訟事に臨む。
3. 1560.11.26 (対質)	原告 崔得忠 被告 孫光呪 曹福元 孫暎	元・被告のうち 30 日以内に理由なく訟事しなければ、大典 に依拠して決折することを同時に申し合わせる ⁴⁷ 。
更推	原告 崔得忠	1. 被告孫光呪などを相手に奴婢訴訟を起こした経緯を説 明(1-1 項と同様)。 2. 父・崔世温が訴訟を起こしたが、彼が死んだため三年間 守喪、翌年は凶年のため停訟し、再び訴訟を起こした ⁴⁸ 。 3. 丙辰年(1556年)に財主・祖母李氏が作成したとおり、叔 母と妹・崔氏の奉祀條奴婢を計算した後、残りは同生などの 分とすると成置した分記を挙げ、併せて参考にすることを要 請。
更推	被告 孫光曙 曹福元 孫暎	1. 丁亥年(1527年)に成置したという李氏の分財文記が偽 造であることを主張(1529年、孫仲噉が死んだ翌年、崔世温 が偽造文記を作成したことを知り、その家族らが破り捨て、 官には知らせなかった)。 2. 祖母(孫仲噉の妻)が1545年に死ぬと、崔世温が祖母が 使役した奴婢 40 余口を連れ出し、8・9 口しか残らなかった が、我々は衣冠子孫であるため、はじめに接訟しなかった。 3. 孫仲噉はたしかに娘婿ではあるが、娘が無後したといっ てその財産のうち奉祀條 2・3 口以外の全てを連れ去るのは 情理上ありえない。

⁴⁷ 大典には原告と被告のうち、理において屈することを自ら悟りながら数ヶ月現われない場合、家僮を捕らえ、その後 30 日経っても現われなければ訟事に応じた者に、訴訟中の奴婢を全て支給することになっている(相訟奴婢 原告被論 中 自知理屈 累月不現 再囚家僮後満三十日不現者(中略)並給就訟者:『経国大典』、刑典、私賤條)。

⁴⁸ これは後述するように、被告である慶州孫氏側で原告側に対して「崔世温が丙辰年(1556年)に虚偽の議送を提起して避訟し、四年が過ぎたいま再び悪知恵が生まれて接訟している」と主張すると、現在の原告である崔得忠がその理由を説明しているのである。

		4. 崔世温は、丙辰年(1556 年)にも虚偽の議送をしたが理に屈して退き、いま再び悪知恵を働かせて訴訟を提起したのである。
4. 1560.11.27 (対質)	原告 崔得忠 曹福元 孫暎	崔得忠が 1527 年、財主・祖母李氏が息子らに許与した分財記を証拠として提出(内容:無後した娘(孫仲噉の妻)の財産を、奉祀條 2・3 口を除いて崔世温に専給することが規程されている)。
更推	被告 孫光喆 曹福元 孫暎	原告崔得忠が提出した文記に署名しない理由説明(継祖母崔氏孫仲噉の妻)奴婢は、祖父生時に漢城府に登録して使用し、己丑年(1529 年)に祖父が亡くなると、継祖母崔氏が済む本府に登録し使用して来た。よって、慶州府に登録する前の 1527 年にこの奴婢を崔世温のものであるかのように作成した文記は、偽造であることが明らかなである。
更推	原告 崔得忠	1. 元財主が残した唯一の文記を偽造とするのは無理がある。偽造だとしても、50 歳の叔母(孫仲噉の妻)が無後したため、奉祀條 2・3 口をまず除いた後、残りは本孫に伝係することが理に適う。 2. 避訟した後に再び接訟した理由説明:丁巳年(1557 年)父喪のため三年間守喪し、翌年には凶年のため停訴した。 3. 孫仲噉は清白であり、家系が貧しかったため、その親知らが叔母(孫仲噉の妻・崔氏)の死後、叔母の財産を本族に分給できないよう、互いに争い分けて持ち去った。 4. 大典の規程に依拠し無子息同生(孫光曙の妻)と三寸(孫仲噉の妻)の己物を同生及び姪などに分けること。
更推	原告 崔得忠	提出した文記の事情を斟酌し、施行することを要請。
5. 1560.11.28	被告 孫光喆 曹福元 孫暎	1. 崔得忠が提出した文記は、その父である崔世温に多くの奴婢を与えるになっており、世温の偽造文記であることは明白。 2. 大典内に前母・継母の奴婢は五分の一を与え、承重すれば三分を加え、良妾子は七分の一、賤妾子は十分の一となっており、この規程を斟酌して施行することを要求 ⁴⁹ 。
6. 1560.12.初 4	原告 崔得忠	父・崔世温が、死んだ孫光曙の妻の奉祀條として与えた奴婢2口及び他の奴婢を、孫光曙の後室・金氏が持って返さず、再び訴えを起こし父が作成した文記を証拠として提示。
更推	被告 金氏 代子 孫夢龍	1. 前嫡母(孫光曙の妻)崔氏が無後身死した後、その嫡母の 3・4 口ほどの奉祀奴婢を父(孫光曙)が使役し、父もまた亡くなったため、無子女前室奴婢を奉祀條として与えるよう規程した法例に従うことを主張。

⁴⁹ 無子女前母継母奴婢 義子女五分之一 承重子則加三分 (『経国大典』、刑典、私賤條)。無子女嫡母奴婢 良妾子女七分之一 承重子則加三分 余還本族 (同上)。

更推	原告 崔得忠	2. 崔得忠が孫光曙の妻の新奴婢であると主張する莫之・青今は、その三寸叔母の孫仲噉の妻・崔氏が別得した奴婢であるため、その三寸の分の奴婢を亡妹奉祀條として与えたものとして扱った事情を考慮し、嫡母の奉祀は嫡母の新奴婢として法例に従い施行すること。
		父・崔世温が 1556 年、嫡子三兄弟に許与した分財記を証拠として提出(娘が無後身死した後、娘婿である孫光曙が娘の新奴婢の他に、特別に娘に与えた妻辺奴婢まで持ち去って差し出さないことは不当だが、奴婢 3 口は母李氏の遺書通り奉祀條として与えるという内容)。
	被告 孫夢龍	崔得忠が提出した文記に対し署名しない理由の説明(婢・莫之、青今は孫仲噉の妻・崔氏が別得した奴婢であり、父・孫光曙が同崔氏に別得して持っていたが、崔得忠が亡妹の奴婢であるかのように虚偽の文書を作成して提出した)。
更推	原告 崔得忠	孫夢龍が提出した文記に署名しない理由説明。①婢・莫之は祖母李氏が叔母(孫仲噉の妻)に別給した婢では無いのに、夢龍が叔母がその父(孫光曙)に成文斜給したものであると虚偽の文書を提出、②夢龍は奉祀する義子女であるため、無後身死した同生妹(孫光曙の妻)の奉祀條奴婢のみを持たねばならないのに、それ以上の奴婢を持とうとしており不当である。③妹夫孫光曙は元来白文記であったものを、叔母をして官の立案をもらわせ、同奴婢を父(崔世温)が妹(孫光曙の妻)の無後奉祀條として与えたのは情理上正しいため、祖母李氏の文書を再び分棟し、署名しない。
7. 1560.12.初7 (対質)	原告 崔得忠	孫夢龍が財主継祖母崔氏(孫仲噉の妻)の立案文記(1537 年慶州府立案)を提出。——娘、孫仲噉の妻に婢1口、娘の財産を伝得した孫光曙に奴婢 6 口と田畓などを斜給するとの内容。
	被告 孫夢龍	
更推	被告 孫夢龍	孫光喆の異性四寸である新寧県に住む鄭景禧 ⁵⁰ が提出した所志(同訟要請所志)を斟酌し、同訟を受諾することを請う。
8. 1560.12.初8	被告 孫光喆 曹福元 孫暎	1. 四寸である鄭景禧を訴訟に共に参与させることを要請。 2. 崔得忠が提出した文書の不合理性を主張。①財主李氏が丁亥年(1527 年)に継祖母崔氏(孫仲噉の妻)の奴婢を世温に専給したとはいえ、四年後の庚寅年(1530 年)に婢・敦之所生を祖母崔氏に別給したところから見て、丁亥年文記は偽造であることが明白。②同祖母が衿得した奴・應孫、婢・延非などは丁亥年に財主が使用し、誰にも与えるという文言が無く、丙辰年(1556 年)に世温が作成した文記に突然得忠などの分と記されたため、偽造である。

⁵⁰ 鄭景禧は本文記上に孫光喆などと四寸の間にあるとして現れ、同訟要求が受け入れられ、結局訴訟に共に参与することになるが、具体的にいかなる理由で訴訟に参与しようとしたのかはわからない。そして慶州府の判決に従い、訴訟の原因となった財産を両家門に分ける際には、遅れて訴訟に参与した鄭景禧には少しも分給されなかった。

<p>9. 1560.12.初 9</p> <p>(対質)</p>	<p>原告 崔得忠</p> <p>被告 孫光喆 曹福元 孫暎 孫夢龍</p>	<p>1. 孫仲墩の子息が何名おり、孫光曙に嫡子いるのかを問うと、これに答弁(孫仲墩には嫡3男女・良妾子孫暎、孫光曙には嫡室金氏と息子一人がいる)。</p> <p>2. この間の陳述を参考に、官式で施行することを元・被告が共に要請する。</p>
<p>更推</p> <p>(対質)</p>	<p>原告 崔得忠</p> <p>被告 孫光喆</p>	<p>孫光喆の父の分の婢・應台と崔得忠分の婢・エ徳を互いに換え、執持することを陳情。</p>
<p>10.</p> <p>1560.12.10</p> <p>(対質)</p>	<p>原告 崔得忠</p> <p>被告 孫光喆 等</p>	<p>金氏(孫光曙の後妻)の息子分の金山蘆浦員田 72 ト 3 束⁵¹と、崔得忠分の奴・墨濟を換え、執持することを陳情。</p>
<p>11.</p> <p>1560.12.10</p>	<p>慶州府 立案</p>	<p>事件の展開過程を要約して立案。立案内容は①大典私賤條に「無子女前母継母奴婢 五分之一 承重子則加三分、無子女嫡母奴婢 良妾子女七分之一 如奴婢数少 則先給妾子」という規程と、同典の「用祖父母以下遺書」条項の注に「承重義子 雖有勿与他之語 勿用」という規程に従い、同訴訟奴婢を元・被告に正確に分け与える。②金氏が持つ奴婢3口、田72ト3束は、元財主崔氏が丁酉年(1537年)に孫光曙に別給し、引き続き所有してきており⁵²、法当祭祀位田も計算に入れなければならない、元財主が処分した通り孫光曙後室金氏に決給する。③残りの奴婢5口は金氏の息子と良妾子に各1口、本孫である崔得忠に3口を決給する。④孫ギョン分の婢・應台、崔得忠分の奴・墨濟なども換えて所有することを許可する。</p>

⁵¹ 金山は孫仲墩の後妻である和順崔氏の親家がある場所であり、本蘆浦員、田72ト3束は中宗32年(1537年)に和順崔氏が孫仲墩の長孫である孫光曙に許与した土地であることが、当時の分財記を通して確認できる。

「嘉靖十六年、丁酉正月十五日、家翁長孫、忠義衛、光曙亦中、許与(中略)別得婢石非一所□□年參拾伍癸亥(…五句…)及、金山、芦浦員田、柒拾貳負參束庫(後略)」(金東旭『古文書集真』延世大、1972年、54頁)。

⁵² 1537年当時分給した奴婢は6口であったが、このうち3口はすでに死亡し、1560年慶州府で立案した時に3口のみが残ったものと思われる。田72ト3束は金山の蘆浦員田のことである(注15の分財記参照)。

〈表 2〉慶州府の決給内容

a) 原告申氏代子 崔得忠 衿	奴婢 15 口
b) 本族 崔得忠 衿	奴 1 口——墨濟(田 72 ト 3 束と相換)* 婢 2 口
c) 嫡子 孫ギョン 衿	奴婢 7 口
d) 女 曹国良 妻 衿	奴婢 4 口
e) 女 鄭灝 妻 衿	奴婢 3 口
f) 良妾子 孫暎 衿	奴婢 2 口
g) 孫光曙 後妻 金氏 衿	承重奴 1 口 奴 3 口 田 72 ト 3 束(崔得忠の奴・墨濟と相換)*
h) 良妾子 孫夢龍 衿	奴婢 1 口
合 計	奴婢 39 口、田 72 ト 3 束

〈表 3〉李涵・金士元奴婢訴訟事件の推移

年代	呈訴者	内容要約
1. ?	原告 李涵	(分記亡失)
2. 1583.2.21	被告 金士亨	1. 父・金塘が、既に分財した新奴婢を再分財した理由を説明(娘婿李殷輔が喪祭に来ず 40 年間義絶) 2. 李涵の法規定解釈の誤り指摘(1548 年受教の「専給義子女」の規程のみ知り、1554 年掌隷院で承伝した「元財主已区處之物 勿許更改」規程を知らず) 3. 兄である金士元が就訟できない理由の説明:病者であり時執人ではない。 4. 裁判管轄変更(移訟)要請:①時執人の住む官へと移訟、②相避要請(原告と訟官とは姻戚の間である)。
3. 1583.2.22	原告 李涵	1. 金塘の生子女に対する新奴婢再分財の不当性指摘。 2. 元田民を官作財主均数分給の法に従い處決要請。 3. 病と称して延訟しようとする金士元を就訟するよう求め、時執人李軫も共に就訟させるよう要請。

4. 1583.2.22	原告 李涵	1. 相伝の避訟の代わりに、囚禁された奴婢を解くこと ⁵³ 。 2. 被告の弟である金士亨より代訟し、始訟させること。
5. 1583.2.27	被告 金士亨	1. 金士亨も父母の喪のため就訟することができない。 2. 奴婢3口、田畝2石を三寸叔母(李殷輔妻)の奉祀條として原告李涵に返還する。但し、時執人のいる官へと移訟するか、金士元の病が治るまで待つことを要求。
6. 1583.閏2.5 (対質)	原告 李涵 被告 金士亨	元・被告中、立訟しながら理由無く就訟しない者について、法により処理するよう同時に要請。
7. 1583.閏2.5 更推 更推 (更推) (更推) (更推) (更推)	原告 李涵	1. 今までの主張を再闡明する。 2. 大典及び受教に従い、新奴婢及び奉祀田民を官が財主となり平均分執するよう要請。
	被告 金士亨	兄である金士元が就訟できず、金士亨自身が代訟した理由説明。
	被告 金士亨	今までの主張を再闡明する。
	被告 金士亨	祖父・金塘が作成した遺書を証拠資料として提出。
	原告 李涵	被告が提出した遺書に対し、署名せず拒否。
	被告 金士亨	祖父の遺書を調査した後、双方が着名できるように要請。
(更推)	原告 李涵	1. 遺書に着名しない事由説明。①提出した遺書に元財主が処分した内容が確かに記されていても、亡女新奴婢は再分財できない。②遺書は自筆や頭官の証筆が無ければ認められない。 2. 経国大典の、義子は前母にとって親母子と同じく、遺書に与えるなど記されていても、遺書に従うことはできないという規程 ⁵⁴ を挙げ、遺書の効力を源泉的に否定。 3. 父・李殷輔が妻家に冷たかったとの言い分は、新奴婢を与えまいとする言葉に過ぎないと主張。 4. 被告側は、自身を訟官と姻戚だというのが、十寸之間に過ぎず、むしろ被告金士亨妻族が訟官と同じ礼安人であり、より近い間柄であると主張 5. 奉祀條で与えようとしている田民は、老弱無実な奴婢と荒廢田畝であり、形式的に数のみ埋めたものに過ぎない。 6. 被告側が主張する「元財主已区處之物 勿許更改」の規程は、元田民に関する規程であり、新奴婢に関するものではない(新奴婢は元田民分給に含まれない)。
		7. 「新奴婢奉祀服喪義子女專給」法條及び「承重義子女分給」の法條文に従った處決要請。

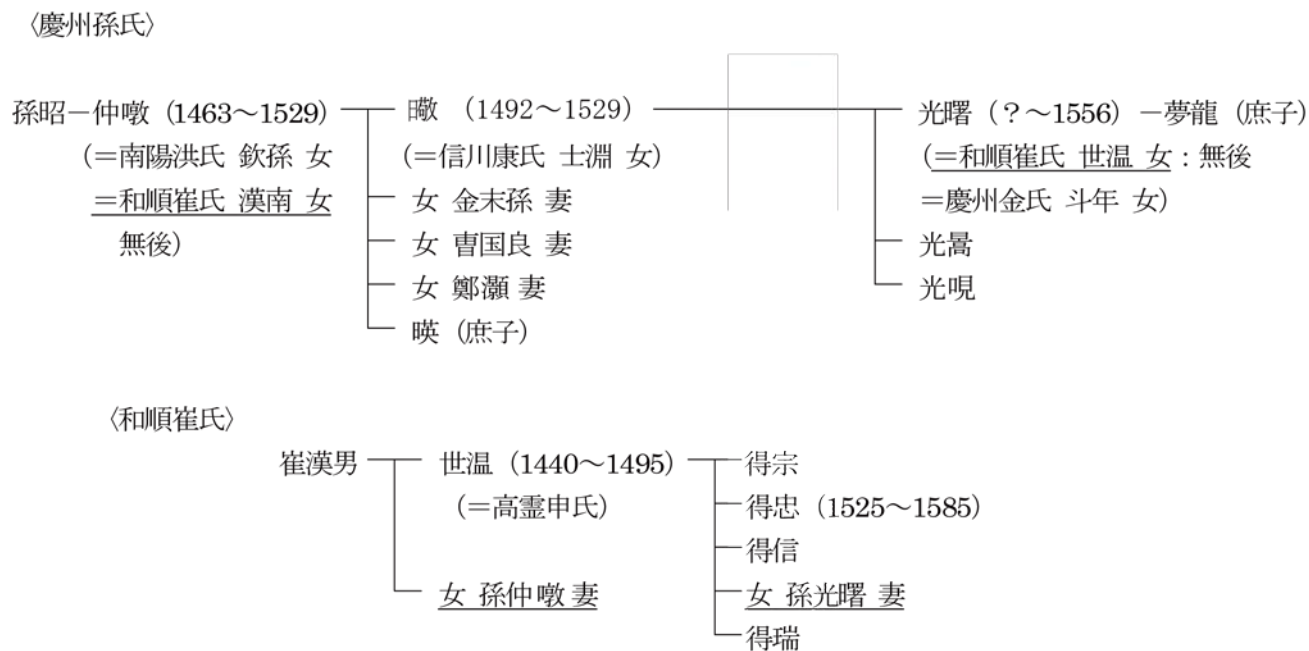
⁵³ 金士元が引続き訴訟に応じないと「相訟奴婢原告被論中、自知理屈、累月不現、再囚家僮(後略)」(『経国大典』、刑典、私賤條)の規程に依拠し、億孫という奴が捕まっていた。

⁵⁴ 三歳前養子女・承重義子、即同親子女、雖遺書有勿許他之語、勿用(『経国大典』、刑典、私賤條)。

120 朝鮮前期無子女亡妻財産の相続をめぐる訴訟事例

8. 1583.閏 2.24	被告 金士亨	裁判を時執人が住む官(安東、軍威)へと移訟要請。
9. 1583.4.19	原告 李涵	1. 金士元は時執人ではないが、宗孫として得後所生2口を 使役しており、分財当時にも金士元の父世愚に奴婢を分給 したので、金士元と相訟するのが妥当である。 2. 被告が様々な口実を挙げるのは、延訟のための言い訳 であるため、これを無視して断訟することを要請
10. 1583.4.19 (対質)	原告 李涵 ・ 被告 金士亨	1. 元・被告が義同四寸之間であり、士人間の争訟は見栄え のするものではなく、また被告が服喪中のため相訟は不当 であるため裁判を中断して和論する。 2. 被告側は李涵前母の奉祀條に奴婢5口を許給する。
11. 1583.4.19	原告 李涵	1. 10-1と同じ理由により、奴婢5口を許給され、和論する ことを再請する。
	被告 金士亨	1. 上と同じ理由により停訟し、奴婢5口の花名を列举する。 2. 元・被告が同時に着名し花名を受け渡しする。
12. 1583.4.19	義城官 立案	1. 事件の展開過程を要約し、立案を作成し、原告李涵に 決給する。

〈図1〉慶州孫氏及び和順崔氏家系と訴訟当事者



〈図2〉安東金氏及び載寧李氏の家系

